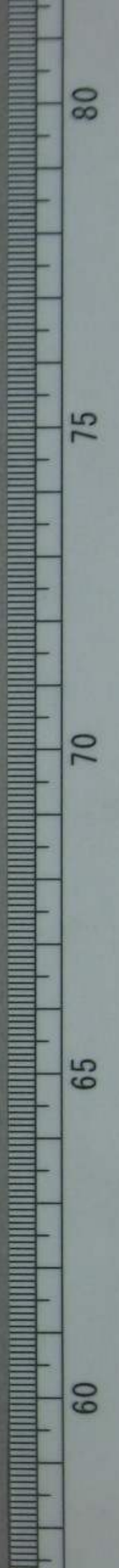


壯行燈籠

茶

持
^ 19
3204
1



月



山東京傳作
歌川國貞画

戲場牡丹燈籠
合卷

板倉居平

特
門 へ 13
3204
卷 1

へ 13
3204
1-2

昭和九年
十月九日
購求

豊國画



牡丹灯籠の事ハ原明洪武十一年吳山の宗吉先生の
著る前灯新話の牡丹灯記より出たり

本朝寛文年中浅井了意といふ人の著る
於伽婢子小牡丹灯記と云ふ小冊ありて載り此春

カウダと牡丹灯の記を翻案して浮牡丹全傳といふ讀本

四冊を編して己廿小冊と云ふ今歳夏六月尾上三朝が狂言

牡丹灯と趣向と古今まじりたる大當りて見物群集と云ふ

牡丹灯の花時ありてひきき見女の眼とてらふりこれ此ちぢ

再又牡丹灯のり火とかが見女と云ふさし伽婢子小冊と云ふ

かひいて一部の繪草紙と云ふ板元の富貴草と云ふ幸ひ

甚しといふん

文化六年己巳八月稿了
同 七年庚午正月發販

山東京傳識



狂言の流の

富貴の

芝居

牡丹灯籠

京傳

名人の

位

の

出

世

輕

音

の

滝

の

お

ひ

京

山

天竺

徳兵衛

小

志賀之助



傾固艶徒
三月盛
返魂秀
自九天
来四園

春
さくら
花や
ころも
ふらふら
牡丹花宵伯

赤星
判官の息女
女郎花姫

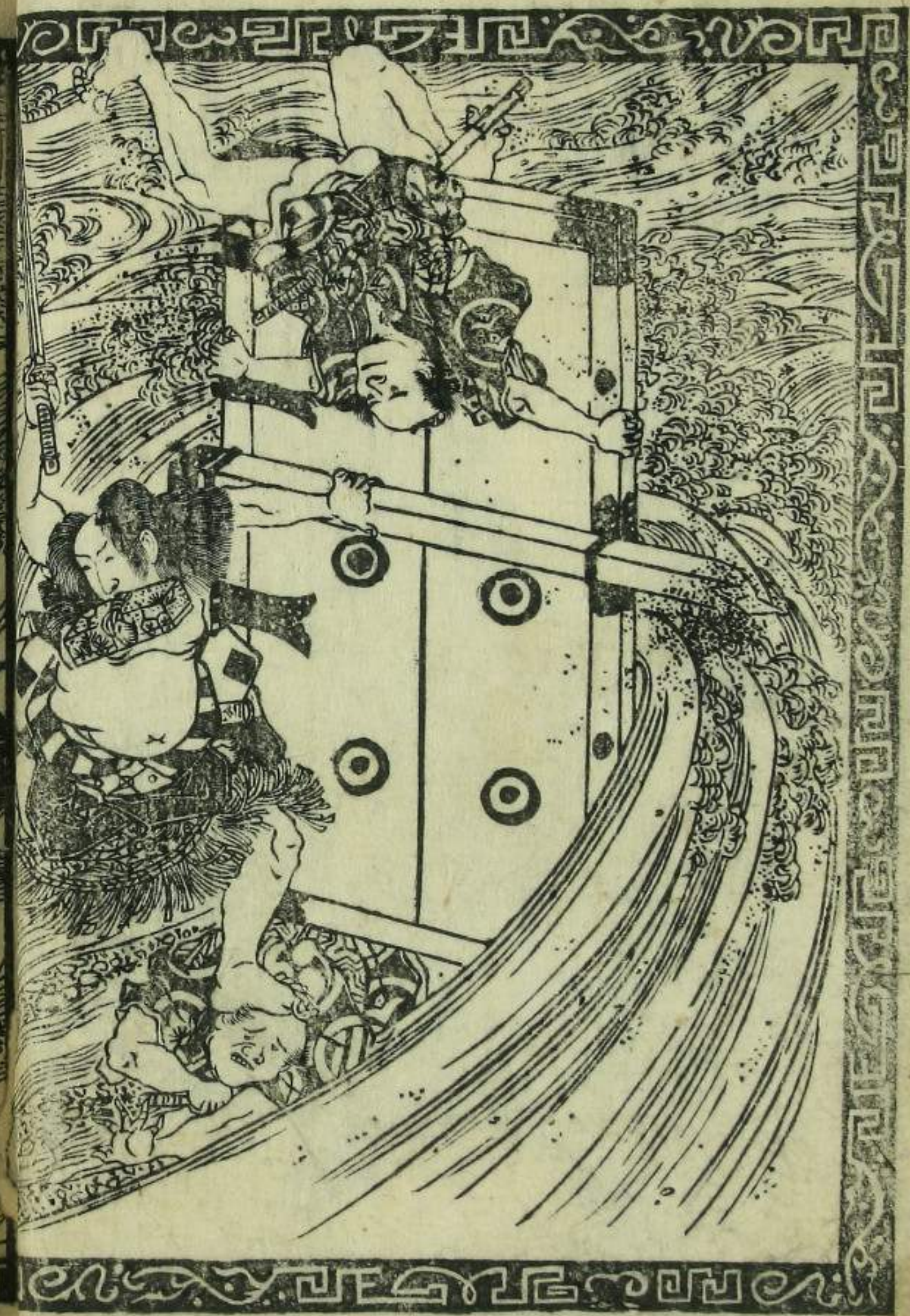
牡丹燈籠の物語り
明の洪武十一年六月朔日始ては
是 本朝永和四年不當て文化六年まで允四百三十
二年と經つるさき唐土にて牡丹燈籠の記を始てつるも
四百三十二年むじの六月朔日あり尾上三朝が狂言も
今年六月朔日より始たりふきの因縁あり

牡丹燈籠

七



大童子
田之助之
僕鹿藏
大カ之圖

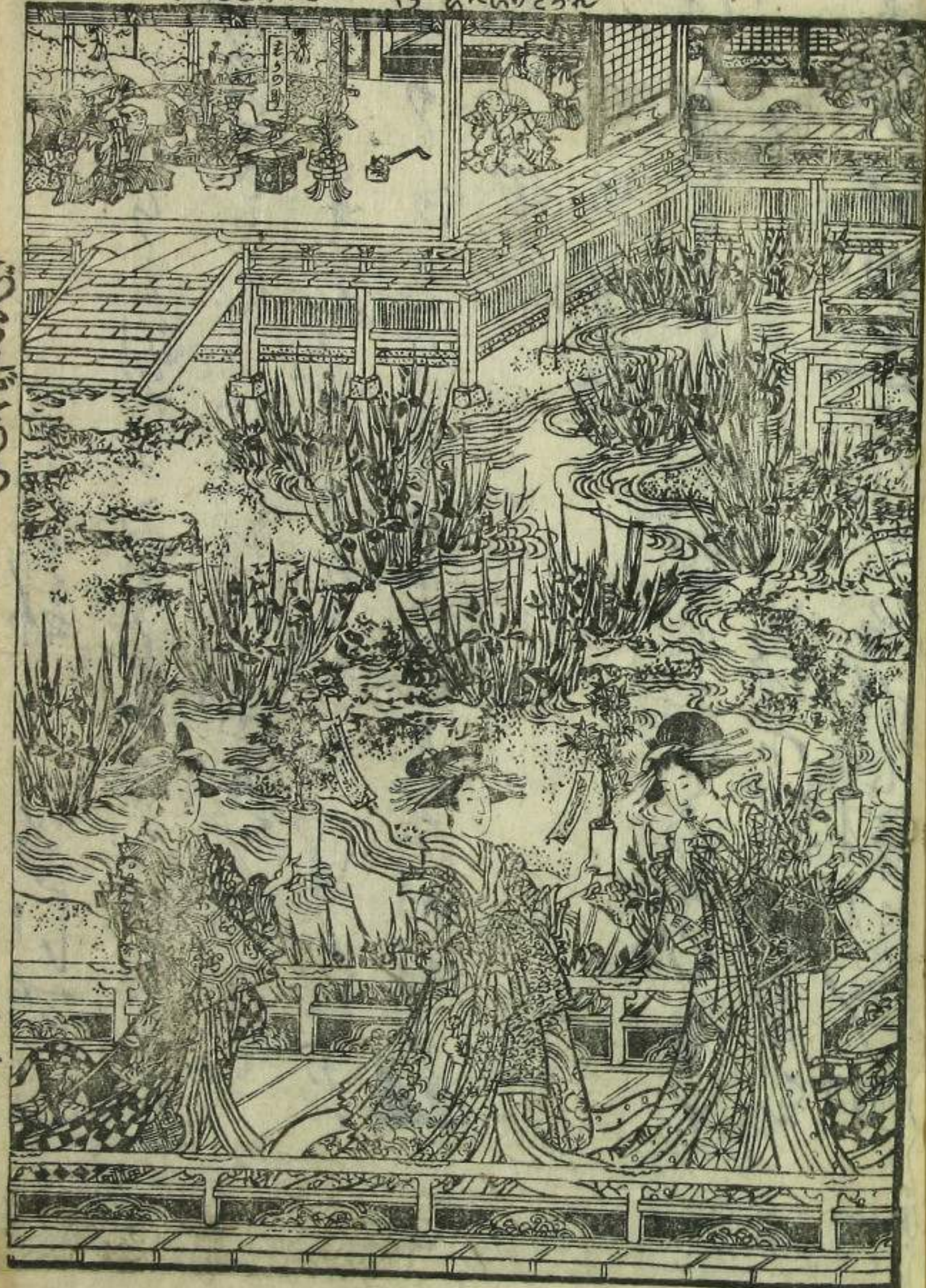


あゝとつとつ
玉津小川急流

あゝとつとつ
玉津小川急流

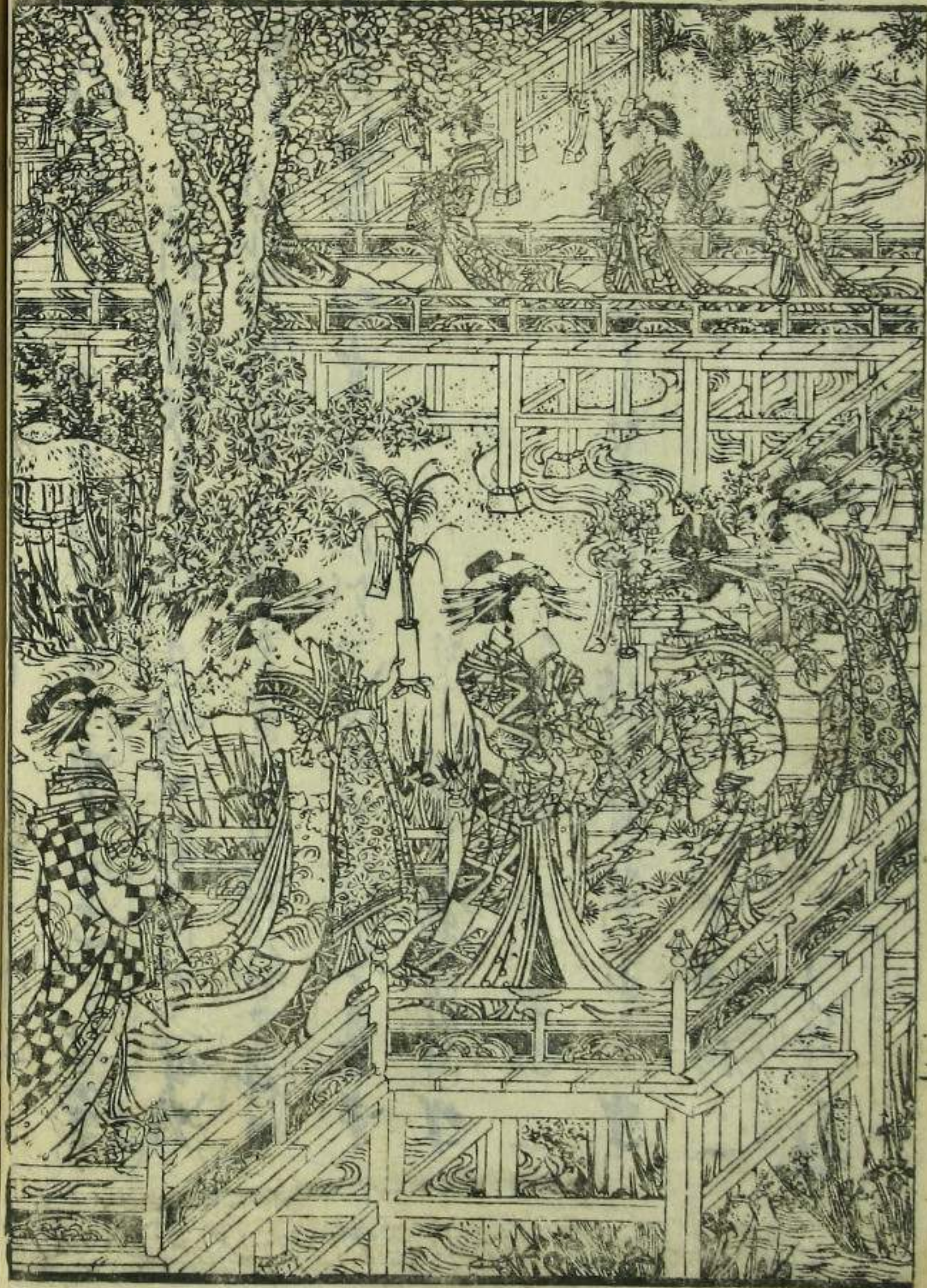


石の光の助のあきま
くまきと花のいとるん



あきまのあきま

あきまのあきま



あきまのあきま



小
の
大
田
の
脚

天
の
か
ま
ら
ん
れ

ふわりとこれにまがめて
さてそのうらさよふけ
なるが二十
ひんの
ゆうえけい
まわるとよこちひ
とれはひれあつ
らぬとささあつ
くめさこのちあつ
まふたのまわりさ
まふたのまわりさ

天
の
か
ま
ら
ん
れ

あつちの
まわりの
あつちの
あつちの



あつちの
まわりの
あつちの
あつちの

あつちの
まわりの
あつちの
あつちの



あつちの
まわりの
あつちの
あつちの

あつちの
まわりの
あつちの
あつちの

あつちの
まわりの
あつちの
あつちの

あつちの
まわりの
あつちの
あつちの

あつちの
まわりの
あつちの
あつちの



あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

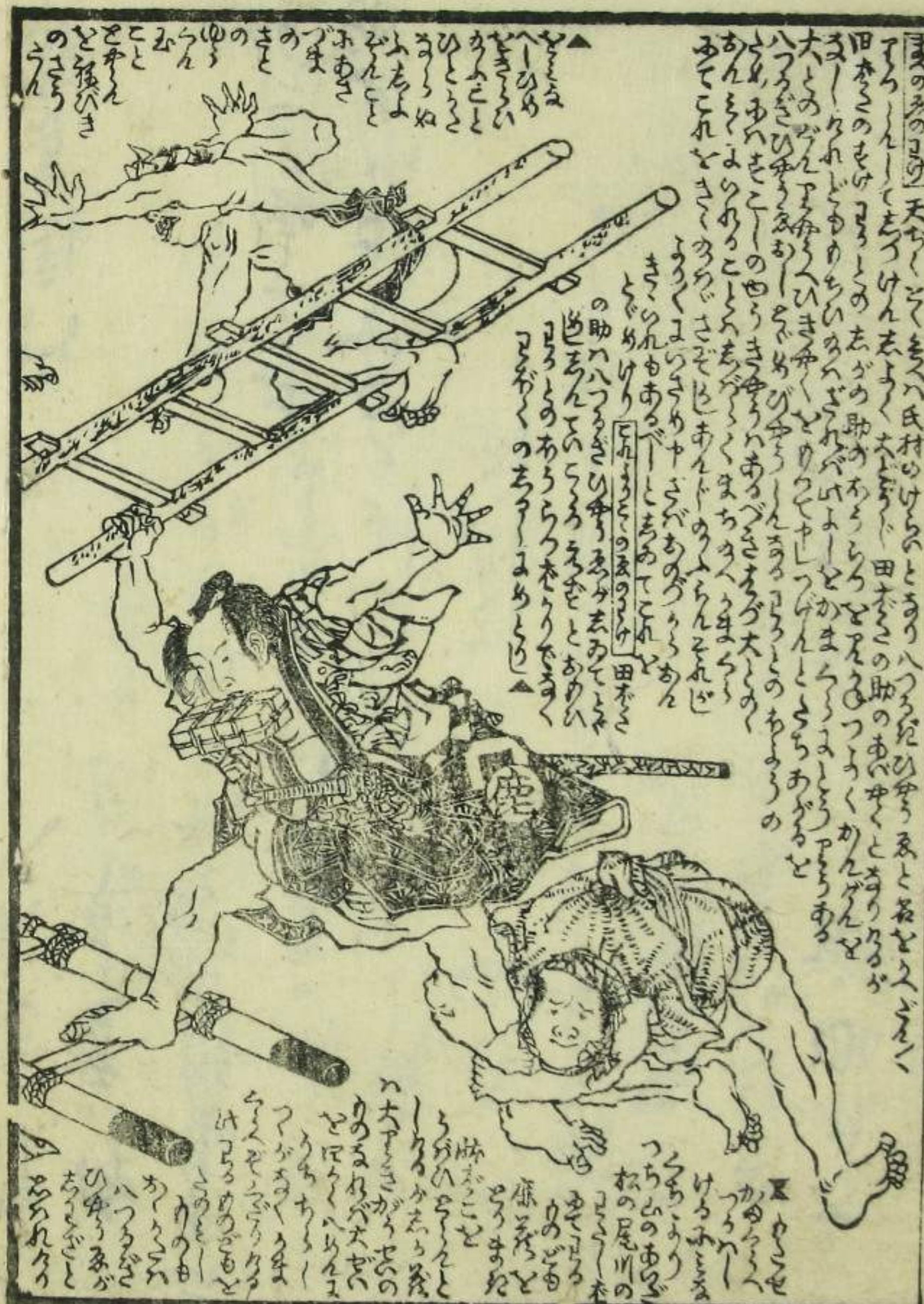
あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん



あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

あつよ
このことなど
いぢのさし
くさきん

